



眠れない夜のために
添嶋 譲

眠れない夜に

夜中に目が覚めて そのまま眠れなくなった
よくあることと 諦めることにして
ヘッドフォンを耳につっこんで
眠れないときに聴く曲を順に再生していったら
ひどく暗い気分になって 自分を責めた

なぜここにいる
僕はどうして生きている

無限ループ 出るはずのない答え
気がついた時にはもう 何度もくりかえしていた疑問

結果 いやな夢を見た
また目が覚めて 少し吐き気がした
深呼吸して 目を閉じる
いつだったか 誰かに教えてもらったストレッチ
伸ばして ゆるめて のばして
記憶が とぎれ る
朝まで眠る

幼い頃から 夜 寝るとき
自分の その日一日
ダメだったところを数えていくうちに
死ぬほど暗い気分になって
そうこうしていると眠ってしまうという
自分でもどうかと思う癖がある

思春期の少年が 眠れない夜に声押し殺して
一人遊び するつもりもないのに 一通り
それで眠りにつくのに きっと似ている
そう思うとなんだか笑えてくるのだが

それにしても

自分でも厄介な奴だな と思う

すきになったひと(抄)

YouTubeに上げた動画を見ていた。くりかえし、くりかえし。何度も、何度も。

真っ暗にした部屋で。ひとりで。

いつだって君は僕の前で笑っていた。

仔犬のようにころころと転げ回りたいわいもないことを話すのが好きで、そんな君を残しておきたくて撮ったものだった。

いつのものかはあんまり覚えていない。アップロードの日付はあてにはならない。

瞬きひとつしないで見ていたので涙が出た。そういうことにしたかった。

シークレット・シークレット(抄)

さっきからショートメッセージでやり取りをしている相手は、僕が同級生だということを知らない。なにがきっかけだったかももう忘れてしまったけれど、ケータイでなら仲良く話ができる。

学校のと看とは違つてとても優しい。おそらく僕がケータイを持っていることすら知らないはずだ。普段はほとんど使わない、というか、必要なかつたから。

知らない、というのは時として自分に有利に働くことがあるんだ。そんなことをぼんやりと思う。もし、親しげにやり取りをする相手が僕だとわかつたらきつとこの人だつて嫌がるだろう。

「クラスにイラつく奴がいてさー」

急にそんなメッセージが届く。誰のことなんだろう。ここで僕の名前なんかが出てきたら、ちょっとどころのダメージでは済まない気がする。僕は身構える。

「どんなヤツなの？」

「なんかいつも一人でいるんだよ。だから別にどうでもいいはずなんだけどね。みんなはキモいっていつて近寄らない」

やっぱり。目の前に現れるメッセージに、うん、知つてる、とはいえなかつた。それ、僕のことだよな、とも。たぶん僕は、自分に対する悪口を、そうとは知らずに話す人の目の前にいるという、とても奇妙な（もしかしたら、情けないほど笑える）場面に出くわしたのかも知れなかつた。

スターゲイザー(抄)

さすがにちょっと安直に過ぎたかなーと、書類の山をひっくりかえしながらあたしは思った。よその星まで手軽に行ける、なんて宣伝していて、電子申請しかないはずのこの時代にまさか、まさか、紙ベースで移民とか開拓とかそんな重要なデータを管理してたなんて。ここんちは一体どんな考えの持ち主なんだ。

あの事件の後、たくさんの人が死んで、たくさんの人が他の星に移住した。父さんも母さんもまだ見つからない。大人になったあたしは他の人たちがそうだったように諦めきれずに、もしかしたら誰か生きているかもしれないと思って探し続けていた。

よく考えてみたらこの星にいるのはあたしでも数えられるほどで、どこかに移住したり新規開拓は申請を出さないとやっちゃダメで、それを探せばどこに誰がいるかわかるはずだ。だからきっと父さんも母さんも見つかるかも知れない、なんてそんな甘い考えで始めたことが途方もなく続く作業だったなんて。

それでも何ヶ月かかかって、この膨大な(もうすぐ電子化するって言ってたけど、ここの村のどこにそんな金がある？あたしは信用してないけどさ)紙の束をひっくりかえして探してきた。父さんも母さんも無鉄砲なところがあるけど、こういう申請事はきっちりやる人だから、もしかしたら。どこかにいるかもしれない。

無限ループ(抄)

一人でいるのも飽きた。ウソ。元気です、っていつてみた。

つらいことがあってもそれは僕のせいなんだからごめんなさいごめんなさいごめんなさいって百回いったら許してもらえそうな気がする。甘いよ。甘いかな。砂糖の入れすぎ。べたべた。あまあま。サイテーなヤツっていわれた。飲み会の誘いも来やしない。僕がいるとつまらないらしい。そりゃそうだ。そんなもんか。人の話は面白い。僕の話は面白くない。それだけ。そんなもんさ。趣味はない。パソコンに向かっていろいろ打ち込んでみるけれど、たいしたものにはならない。プログラムひとつも打てやしない。能無し。今日いわれた。気にしてないよ。ウソだけど。根に持つなんて性分じゃない。これもウソ。お昼ご飯はいつもひとりで食べてる。誰も誘ったりしないから。誰も声かけてくれない(そりゃそうさ)。

帰りがけ、ほんのちょっとだけ泣きそうになった。もういい歳したおっさんなのに。情けないと思った。これは本当。泣き虫なキム氏。僕の名前はキムじゃない。いいわけ。だらだら。へらへら。うつうつ。最近僕の耳の奥から別の人の声が聞こえる。キムっていうのかな。泣き虫泣き虫。泣き虫なキム。ウソばかり。バカみたいだ。

いじめられてた記憶が頭をよぎる。あの時も泣いてすんだじゃないか。バカ。みんなあきれたんだ。通過儀礼。お約束。毎日の習慣だよあんなの。

暇さえあればメールチェック。誰もメールをよこさない。そりゃそうだ。誰も僕を必要としない。僕は僕。いつもそうだ。会社も。家でも。ひとり。いつも。中島みゆきは歌わないけど、ひとり上手が好きだ。

眠れない夜のために(お試し版)

<http://p.booklog.jp/book/36774>

著者：添嶋 譲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/literary-ace/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36774>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36774>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.